

『この人は・・・』(マタイの福音書 13章 53-58節) 2022.9.25.

<はじめに> 他人を理解することは、社会で生きていく上で不可欠です。どうやって相手を理解し、その理解を深め、更新しているでしょうか。「イエスとはどんな方なのか」は聖書のテーマで、イエスに注目する者、この方を信じ歩む者にとって、幾度も問い掛け、深めておくこと大命題です。

I 故郷ナザレへ(53-54)

①天の御国をたとえて

13章には8つのたとえがあり、いずれも天の御国に関するものでした。天の御国は、今も昔も人には認識理解し難いものです。神がすべてを支配されている世界がどんなもので、その原理原則を知らせるために、イエスは地上のことにたとえて説き明かされました。

②話し終えると

マタイの福音書はイエスの教えを5つにまとめています(①5-7章、②10章、③13章、④18章、⑤24-25章)。各部分は「話し(語り)終えると」(7:28、11:1、13:53、19:1、16:1)の句で締め括られています。

③ご自分の故郷へ(54)

これまでたとえを語られた場所「そこを」(53)とは、どんな所でしたか(1)。イエスの活動はカペナウム中心でした。そこから故郷ナザレまでは南西に約 30 kmほどです。イエスは故郷に赴き、会堂で人々を教え始められ、彼らはその教えと御業に驚き、互いに尋ねます。

II この人はどこから(54-56)

①人々が見るイエス(55-56)

イエスは聖職者の家系の出ではなく、大工の息子に過ぎません。父ヨセフの名も姿も出て来ません(12:46)から、既に亡くなっていたのでしょうか。母と多くの弟妹をここに残して出て行った長兄が帰郷してすぐ、人々を教え、奇跡を行えば、戸惑い怪しむのも当然です。

②相手を理解する

「自分なら…」「普通は…」「きっと…だろう」を糸口に私たちは相手を理解しようとします。また周辺の見解を聞くこともあります。更に相手に直接接触し、言動を観察し、不可解なことがあれば尋ねる方法もあります。イエスを知るために、私はどうしているでしょうか。

③人々と弟子の違い

イエスの知恵と力の由来を、ナザレの人々は自分たちが知っているイエス像からは見出せません。不思議に思い疑問を抱きつつも、直接イエスに尋ねてはいません。弟子たちは疑問をイエスに持って行きました(36)。この違いは、両者の何から出ているのでしょうか。

III イエスにつまづいた(57-58)

①分からないから…

分からないことを尋ねるには、謙虚さと勇気が必要です。また、尋ねる相手への信頼がないとできません。ナザレの人々はイエスを幼少期から知り、その家族も熟知していましたが、イエスに尋ねるほど信頼していません。聖書は彼らの不信仰を明記しています(58)。

②こうしてつまづいた(57)

自問自答するうちに、彼らは勝手にさっさとつまづいたのです。つまづく人の典型です。イエスのうちに輝く神の御子の片鱗を見ながらも、自分の既知の枠に収まらないというだけでつまづいたのです(13)。イエスは人々が陥りやすい轍をご存じです(ヨハネ 9:39-41)。

③不信仰のゆえに(58)

ガリラヤ各地にくらべてナザレではイエスは多くの奇跡をされませんでした。彼らの不信仰が全能の神の御子の力を縛り、止めてしまったのです。不信仰なことば・態度にはどんなものがあるでしょう。ならば、信仰を表すにはどんなことばと態度が相応しいのでしょうか。

<おわりに> 「イエスとはどんな方か」、これが聖書のテーマです。イエスを知る情報は聖書の中に、この方との交わりと語りの中に満ちています。この方を信じるか信じないかはほんの小さな違いから始まります。私は、イエスをどんな方として見、向き合っているでしょうか。(H.M.)